

南の国の「ナデシコ」税理士

成功へのキセキ

第13回 少しでも、南の国に恩返し

「今回の支給物資は、ロンジー・飲み水・懐中電灯・インスタントラーメン・お米・油・塩です。ロンジーは2000人分必要です。現在在庫を探しています。昨日は男性200枚 女性39枚を手に入れました。インスタントラーメンは、各家に2つくらい配付したいので、約27箱必要です。緊急援助のときの必要カロリーは最低2100カロリーと定義されていますが、足りません。飲み水は緊急援助のときに、一人平均15～20L/日必要というのが常識なのです。全然足りていません。」

日本ではあまり報道されていませんが、ミャンマーで大規模な洪水被害があり、100人以上の方が亡くなり、100万を超える人が家を失いました。上記は、現地で支援活動を行っている日本人のお医者様から届いたメール。ロンジーとは、ミャンマーの民族衣装のことです。

先月号でも書きましたが、私はスタッフ25名が全員女性だけの会計事務所を主宰するかたわら、戸沢暢美財団(以下「戸沢財団」)という財団の理事長もしています。

戸沢財団は、恵まれない子供をサポートする団体に資金援助することで、その子供たちを支援する財団です。大規模洪水で生命の危機にさらされている子供たちに、すぐにでもお金を届けたい。でも今回に限りユニセフは、「ミャンマー洪水被害」に限定した特定寄付金の口座を開設しませんでした。一般寄付として拠出したお金が、どのように使われるのか、部外者の私たちには分かりません。寄付金の一部は、ユニセフの運営費用として使われる可能性があります。

寄付したくても、寄付先がない。

私は、途方にくれました。今回のヤンゴンの滞在期間が1週間。現地でも日本人会などが中心となって、寄付を集めていましたが、最終的には赤十字やユニセフなどに寄付してしまい、でもそれでは、ダメなのです。

なぜなら、戸沢財団には譲れない、ポリシーがあるから。それは、資金が子供たちに「直接届く」ことを確認できる場合に限り、寄付することです。

戸沢財団のポリシーは、もちろん戸沢暢美の意思に

よるものです。自分が逝ったあと、遺った財産をどう処分するかで悩んでいた彼女は、最初、某公益法人に全額を寄付しようと考えていました。しかし、その法人の理事報酬が年間1000万円を超えているなどの情報をネットで見つけて、考えが変わりました。

「寄付したお金が、理事のオジ様のペンツに変わっちゃうなんて、ぜったいにイヤ。我慢できないわ。」何故ならそれはある意味、彼女が生きた証でもあるお金だからです。

原さんに全部任せるから、子供たちのために使って。

だから戸沢財産は、徹底的に、「顔の見える寄付」にこだわります。ビジネスセンスに長けたNPO法人の運営資金や、資金集めのイベントに使われる可能性がある寄付は、NGなのです。

私が「顔の見える寄付」にこだわる理由は、他にもあります。戸沢暢美が亡くなる前年、東北の大震災がありました。そのため、「災害などで親を亡くした子供」というのは、財団をつくる時、戸沢と私が最初に思い浮かべたターゲットです。

ところが、彼女の想いを受けて活動をしているうちに、私はあることに気がつきました。両親など、二親を亡くした子供には、まだ行政やNPOなど支援の手があるのですが、片親だけを亡くした子供には、何もない。とくに父親を亡くした母子家庭の多くが、貧困に苦しんでいる実態を知ったのです。

同じころ、川崎の中学生殺人事件などもあり、子供の貧困問題が、クローズアップされるようになりました。川崎の事件の背景にあるのは、やはり貧困です。母親は、生活のために朝から晩まで働き、子供の世話をすることができません。やがて子供は学校に行かなくなり、その子が大人になったとき、貧困から抜け出せないというマイナスの連鎖が起きるのです。

「貧困」は、子供の虐待やネグレクトという問題も引き起こします。

財団の活動を通じて、私はある養護施設と繋がりができました。そこに保護されているのは、ほとんどが親

◆筆者 原 尚美 (はら なおみ) プロフィール

税理士。東京外国語大学卒業。TACの全日本答練(現:全国公開模試)「財務諸表論」「法人税法」を全国1位の成績で、税理士試験に合格。直後に出産。育児と両立させるため、1日3時間だけの会計事務所からスタートし、現在は全員女性だけのスタッフ30名、一部上場企業の子会社やグローバル企業の日本子会社などをクライアントにもつ。ミャンマーに会計サービスの会社を設立し、海外進出支援にも力を入れている。著書に「小さな会社のための総務・経理の仕事がわかる本」「小さな起業のファイナンス」(いずれもソーテック社)、『51の質問に答えるだけですぐできる「事業計画書」のつくり方(日本実業出版社)』『トコトわかる株式会社のつくり方(新星出版社)』『世界一ラクにできる確定申告(技術評論社)』『一生食っていくための士業の営業術(中経出版)』など。その他、「経理ウーマン」「デイの経営と運営」など雑誌への寄稿や、商工会議所、中小企業投資育成株式会社、日本政策金融公庫などでの、セミナー実績も多数。

の暴力から逃れてきた子供たちです。単なる暴力だけではなくありません。親からの性的暴力というの、珍しいことではないと聞きました。性的暴力は、心の殺人とも言われ、子供の人格を破壊します。養護施設のスタッフは、天使のように優しく、傷ついた子供たちを愛し、育ててくれます。それでも性的暴力を受けた子供は、自分が生きる理由を見つけることが、なかなか出来ないのだそうです。

養護施設の例ではありませんが、子供の虐待問題に取り組むNPO法人の方から、こんな実例を伺いました。虐待を受けた子供は、自分の子供の愛し方がわからない。大人になり、人を愛し、結婚し、夫からも夫の家族からも愛され、そして妊娠。やっと幸せをつかめたと周囲も安心した矢先のことでした。夫が出張で一泊したその日に、赤ちゃんをお風呂に沈めてしまったのです。

彼らは、物語の主人公などではなく、現実の人生を生きている子供たちです。

現実には厳しい。養護施設にいる子供たちも、18歳を過ぎたら、国の支援は一切なくなります。学費を払ってくれる親はいないので、大学に進学できる子供は、ほとんどいません。奨学金制度も、親が借りてくれないと利用できず、はじめて知りました。彼らは高校を卒業したら、働いて、一人でアパートを借り、

一人で生きていくしかないのです。

戸沢から預かった大事なお金を、本当に困っている子供のためだけに使いたい。人生はそんなに悪いことばかりじゃないと、一瞬でも感じてもらいたいです。

戸沢暢美に頼まれてスタートした財団の活動ですが、これは私のミッションだと思えるようになったのです。

明日は日本に帰国するという日。私は友人のジュエリー・ショップのオープニングパーティに参加しました。夜も更けて、もうお開きという時、以前に一度だけお会いしたことのある女医さんが、お祝いに駆けつけたのです。彼女は普段は、無医村をまわって、巡回診療をしているのですが、洪水被害の支援金を集めるために、6時間かけてバスに乗り、たった今、ヤンゴンに着いたばかりだということではありませんか。

支援者からの寄付金を受け取ったら、翌朝5時には、またバスに乗って、農村へトンボ返りする予定だという彼女に、私はその日のうちに用意できるお金のすべてを託しました。

ホンの少しだけど、南の国に恩返しできた気分です。

財団の活動をしていると、こういう不思議なご縁にたくさん巡り合います。「人生は、そんなに捨てたもんじゃない。」救われているのは、子供たちではなく、私の方かもしれませんね。

好評
発売中

一生食っていくための「士業」の営業術

原 尚美 著(中経出版)

1,500円+税

カネなし。客なし。コネなし。

開業と同時に出産したため、普通の新人ならたつぷりあるはずの、時間もなし。

文字通りゼロからスタートした会計事務所を、女性だけのスタッフ22名の規模にまで成長させたノウハウについて書いた本です。

特別なスキルもコネも持たない、すべての平凡な個人事業者に、ビジネス拡大のヒントが満載です。

「戦略」「集客」「マーケティング」...
これからの士業に
必要なことが
この1冊で
全部わかる!

税理士・行政書士・司法書士・社会保険労務士...
独立して働くすべての士業に「必読」!
「影響力のある」マーケティング!
「何もしない」で成功する!
「海外のスキル」を1つ1つ身につける

一生食っていくための
「士業」の営業術
(原尚美)

一生食っていくための
「士業」の営業術